

遠く羊水をはなれて

吉田惠吉

もくじ

遠ざかるヒバリ 4

はじめてのバースアイ 5

うすい重力 10

うめくさ 15

やさしいジャンケン 18

未成スイッチャー 23

恐竜の唄 32

午後のカードに 35

見知らぬ速さく 36

耳よりな話 40

酔いどれカーブ 44

ゆっくりターンする 47

秘 事 50

風のとさき 53

あとがき 56

遠ざかるヒバリ

離陸を知らない

模型飛行機の翼を

しっかり輪ゴムで止めただけ

あてどない滑走を眺めている

少年の草むらに

羽のない雲となって

皮膚は滑空を呼吸したのに

眺望は瞬きだけ

みごと飛んでいたのは

昨日の夢で

はじめてのバースアイ

誕生月は寝苦しいよ

発育不良が起きだして縁側まで

鼻先に冷たいガラスの向こう

松としだれひばと泰山木の

眠りをさまたげ

灰色の翼はどこへ消えた

綾子のもっと向こう

東の方

闇が燃え上がった

かあさん あれは何

つま先立った指先に弾ける赤

実のない柿の木にのぼっても

何も聞こえない薪割り

見えない杭がとんぼ返り

祖父さんは肋骨を折って

無花果の上で寝込む

八重咲きのツツジの陰で

泥みみずと殿様ガエルを戦わせ

雨に打たれながら姉との諍い

畦道が小川に告げ口をして

焼き尽くした時を滑らせる

あのと時姉さんは眠っていたの

夏の大三角さえ見なかったわ

濡れた屋根を乾かしている風

それとも爆音だったかしら

桐の葉のかわいた匂い

二十五年後 東の街へ引越

松としだればはと泰山木が

移した

記憶に向き合って三年

(柗や木屋は太り馬酔木は瘦せた)

祖父さんは聴きだしたろうか死ぬ前に

二十八年前のあの夜に木々が見たものを

姉は西に嫁ぎ

遅れてやってきた母は方角もわからない

けれど人知れず庭木の手入れ

接ぎ木もせずにもってきた

あの柿の木は西日をさえぎってたわむ

尾長に記憶をつつかれる秋の休日

あの頃生まれでもいなかった妻に枝を叩かれ

子らの掌を赤く染める

うすい重力

稲穂のうねりもこけつまろびつ

地鳴りが両の足にまとわりつく

老婆の懐の道におののき

幼い砂利を嘔む

この夕刻の震え

水を撒け水を

後頭を砂埃にぶっつけ

桐の花を吸う

午前のたかぶり

バケツの底が抜けるまで

撒け水を

はちあわせする自動車の響きに

はがれ落ちた映画ポスターが濡れたら

母の情事はもうはじまっている

もつとしっかり

溜め池から這い上がるたび

野良猫は首を振る

鋭く尖る

ヒゲが鳴く

汲み尽くす用水に

まぎれこむ

水中花ならぬ山椒魚

戸口に老いたる喉は枯れ

雪ノ下にもたれる

やさしい皮膚

地図になるまで少女をひろげても

母には言うな

父にも届かぬいたわりを養え

老いにやさしさ

誰かを待つ改札口に佇つまで

マッチ箱に忍ばせたカミソリのひと撫で

家を囲む季節の屋根うすく

ブーメランのごとく青春を潰す

落ちてから浮かぶまで夢を殺ぐ

大嫌い

口腔ふかく

黒沼のふたつの瞳をうめる

肉に食い込む縄目をほぐし

街を流れる川と背中あわせ

予望もなく中空に息づく

うめくさ

ドル・サラで見ていたレンタル・ビデオ

通勤の行き帰りは文庫本

とりあえずとりあえず

テトリスにはまってしまった

休みの速さは一万点

就業前も叩いたキーボード

思わず夢見た在宅勤務

とりあえずとりあえず

バドミントンにのめってしまった

今夜の高さは五メートル

自転車に散歩を載せて

きれぎれの感覚を風に飛ばす

二人で辿った引つ越しの地図

暮らしの節目も遠ざかる

いまここだけのビールに乾杯

一時の目覚めも定まらず

不時の眠りもあてどない

とりあえずとりあえず

エレクトリック・パルスに驚いた

未知のくしやみにふりかえる

やさしいジャンケン

見知らぬ渚を

風呂敷にぶらさげ

傾いた砂浜に礎を投げ込み

幾重にも立ち騒ぐ波枕

閉ざされていった方角に海を抱いている

しおまねき

山間の廃村を

一枚の秋にくるみ

この家を焼いた炎で

かわかした位置はどこに刻みこまれたか

取り残された礎石の墓標は冬に埋もれる

風の線分

夏の床下から

取り出した掌の蟻地獄に吹きかける

声でひっくりかえった扉に

かげろうの春は節を抜かれ

空に投げ上げた釣り竿を渡ってゆく

少年の韻律

張り巡らされたビル街に見とれて展望台の

地につかない足は空に縛られる

うつむいた視界を閉ざす無言の高さに

全体重をあずけたまま滑り降りる

手がかりをつなぎとめるエレベーターに

届いている恣意と偶然の瞳

鳥になればいい

五体が打ち出す一網ごと 都鳥は

失速する臓器に不時着し

暗転する翼のリズムは管制塔になじまない

中空にもつれる力線の雲塊から

ジェットコースターになって

風と競う

(ここはどこ)

三歳の手が書きなぐる鬼ごっこ

(みーつけた)

一本の直線が引かれるまえに

(通りゃんせ)

幾枚の時間が漉されたか

(この指とまれ)

二分法では模写しきれないから

(もうかえろ)

まけーてくやしい

はないちもんめ

未成スイツチャー

読んでみようか

書きため

がらくた

無に帰せ

「眠りの言葉」

ローソクに罪をともしれば

鼻息で消してみせる

食後のテーブル

「知恵の誉れ」

削りおろした鉛筆を女に贈る

チビた消しゴムを男に贈る

受話器も知らない別れ

今どき

絹のペダルを脱いで

夢のブランコを抜け

黙らず入口

カバン

キャスター

背負い紐

探して出口

手荒な

嬉しさ

滑る

ジッパー

(ここで)

気持ちだって

つつたっているだけ

(いま)

節穴抜けて障子にさらす

遠い暗箱

むなしく

むやみに

この

無意識

踊り

狂う

「無知の憎悪」

ひと筋縄なんて

燃え尽くせ

両極端を手始めに

からかってみれば

かるくなるかるくなる

いったいどこがだなんて

ひと皮むけてるぜ

抱くところなんて

ありやしない

嫌な

奴

「不幸なものには悪く」

見当をつける

「幸福なものにはむずかしく」

昨日は明日で

はずみでし

明日は昨日

ふざけてし

ふと見つめれば

からんでし

見るものすべて

さそってし

ゆっくりまわりだす

きそってし

手をこまねいて

おもいあまつて し

無力をさらす

ひとりで し

手をたずさえて

ぶつたたいて し

夢で飛んで

ひねって し

気ままなヒーロー

まよって し

腹の底から

どうでもいいし

ニヒルだなんて

やめちゃったし

テクノロジーか

しょうがないし

宇宙・アジア

おもいこんでし

老けてみる

ゆきだおれてし

「若者には良い」

や
り
な
お
し

文字の地殻から

言葉の地層へ

瞬時にたちあげ

またたくし

像の離脱で

起動する世界

* 「
」内は諺より引用

恐竜の唄

麻のハイウエーで目覚めた歌詞は

しけた倉庫に古着のロックンローラー

ニッキーとパメラは踊ってたよ

街区の目次が瞬くままに

のきなみつぎはぎカバーははずれ

いかす重ね着のボタンも

夜の地下鉄がひきちぎる

温い胎児の囁から

テイラノザウルスのアバラの中へ

知らないコードが立ち並ぶ

空中歩廊を止まり木に

ビル影を逆さまに吊るす

気づきのカプセル呑みくだし

突き破る避妊のシャッター

音たてて

音速の母胎がたわむ

二十歳のアーケード

いつそ輝き突き抜けて

走って逃げて死んでやる

ぶっちぎりの隕石みたいに

モールからモールへ感覚を

買いまくるメリーゴーラウンド

こう重力が薄くなっちゃ

やれダイビングもままならず

もう佇っちゃいられぬ

いいかげん

ゴジラの広告みたいに

屋上広場へ投げあげる

一握りのイントロを

ジッジージッジー唄ってる

午後のカードに

窓の外はどこまでも距離感のつかめない冬の昼下がりの曇り空にうめつくされそうとしていた　北風をさえぎるように立ち並ぶ杉林のシルエットの向う側　高速道路からかけおけるように日本海に切れ込む平野はボンヤリかすみ海と空の区別もつかない　一月の見えない宇宙船が幾枚もの幕をはりめぐらして動いている　衛星放送を見事にキャッチする半島も　帰港する漁船も　波の華に洗われる島も　出生を陸封した大陸も　窓から見れば無数に重なったカードの一枚に過ぎない　垂直に　透明にあるいは不透明に　一万年かかって眼をなくしたアマゾンのナマズは　光を闇を　洞窟を　そして世界を　どんなに折り重なった言葉としたか　どのように明確に　正確に　窓をめくり続けて　いかなる像に触れたか　扇状地に杭を打ち込むように　ビル街は異質な層を覚醒させ　新しい眠りの窓に誘い込む　今日も正確な周期で　ランドサットはわれわれの昆虫記を模写していく　原っぱを広場に　プラスチックをマイナスに　公園を部屋に　アングラをクラックに　そして存在を不在に　イメージだけにしようスケッチ

見知らぬ速さへ

高く浮いた気圏や

遠く乾いた地層に

身体を運んでみたい

経てきた風をいっばいうけて

流れる無意識そのままに

消えゆく地図の速さにまぎれこむ

遠く羊水をぶちまけた

「狂った人よ

愛するように

壊れれば

壊れた形だけ

この世はゆけるのか」*

であった世界がうすれ

もう標的が逃げ出している

もぬけの殻になってかけてゆきたい

バッテリー・パーク・シテイへ

行き場のない土砂の埋め立て地に

釘づけのファサードがゆらいで

セットバックするたび

幾重にもぼくらの視線を打ち込み

ジャケット・デザインが立ち上がる

空にも溶けずさまさまの

暮らしぶりがき消して

後退するガラスの一枚一枚にも

それぞれ無言のことばは光る

からっぽのウィンター・ガーデンで

新しい季節を読み

ゲートウェイ・プラザの小広場の夜

見ていたのか見られていたのか

夜も昼もなくしちまった

これぞ既知の風景 やわらかく

父母も知らないぜんぶがあるのか

もつと遠くへもつと行きたい

* 鎌田吉一 「六月の葉」

耳よりな話

君にダイヤルしたのに

はめ殺しの窓

電話ボックスが宙に浮いて

視線で印字するビル壁

よく聴き違える呼びだし

打ち放しの見出し

地階から屋上まで

幾層にも溶けている

ぼくらの居場所

しゃくれて住み込み

ひしゃげてひとまわり

都心から郊外へ

一字もワープできない

指先の袋小路

紙袋の小鳥となって

ほろ苦い喫茶の恋人

さしちがえて

宇宙で逢うまで

眼下に潜る

字余りのシステム

踊る禁則処理の踵

蹴り込まれて

博物館の裏まで

影が伸びる

覗けない積層

触れず回路の裏側

字幕は消え

雲型定規に街路はたわむ

何処まで積み上げる

撮りもらした季語

不通の空に尖る

レンズで描き込む

起源まで

酔いどれカーブ

呑み疲れ

芯までしびれ

深夜の豪雨もいいもんだ

夢の底まで水浸し

雨に唄えば

アスファルトに跳ねる小魚

街路の闇で小鳥が啄む

センターラインがポキポキ鳴って

夜に轆かれる街が好きだ

せわしなく溶けて

ネオンの層も背きあう

頷くふた色なびく街区に

天使のカクテル

架空の装置のふるまい酒に

スパークする自販機のめまい

振り分けられ

別れて粒ぞろい

素敵なカーブ

ピンボールマシンに描き込まれ

ひっきりなしに栓を抜く

徒勞の舳も笑ってら

ゆっくりターンする

くるくるまわる

日暮らし 仕事 少しでも

巻上がるなら

疲れのクリーニング・テープ

ゆっくりターンする

薄い普段着

時短の休みを着こんでみる

誰の予報も当たりやせぬ

揺れるカーテンの向う側

雨になるかも車もないし

ブルーハーツの新譜の午後へ

ゆっくりターンする

幻のブルー・ハイウェイ匂わせて

免停くらってぶつとばせ

あれもこれも

それつづけていつか

楢田の部屋に柔らかく

ふたりの座が揺れていて

ゆっくりターンする

どいっもこいっもまっぴりめん

アジア的家族の夕間暮れ

秘事

空模様で占うなりわい

カナシバリを見なくなった寂しさ

わずかな田畑売り払い

農作業との

縁の切れ目で

果てたエロス

農家がこける

母の背から

落ちた恋の一行

ライトバンが運んだ

結婚の二文字

埋めた田んぼは黙す

土砂の石ころは騒ぐ

さまよえる空腹に

砕いて棄てた飢えのなか

育む出来事

その日帰りの旅もいい

現在化した親鸞だなんて

まるで寺子屋みたい

くちびるに

よく冷えた菊水も揺れて

車窓が映す言葉とまなざし

日本海にふたりを浮かべて

絶えざる帰還

風のあとさき

家中の窓を開け放つ

触ってくれていいんだよ

手垢で磨きあげた自転車のように

走りすぎていくんなら

記憶の渦の縁に沿って

みんなもではらってしまった

柔らかい風の中の河原がいい

ゆらぐビル街の谷間からの月見としゃれて

騒音にさらされる水の中

河口まで走れ思いつきり

誰もいない空っぽの駐車場

棄てられたウオークマンも唄ってる

光と闇が踊る

はじめての展望台はたまらない

飛び越す足が凄いのだ

契機に頼っていいのだよ

持てるものなど少しもなくて

つかまるところもないのなら

あとがき

詩を書くことは生活のナイトシフトみたいなものだ。

何年社会人やっても入口と出口がすんなりつながらない。

生を、日常によってあゆませるといふことはそんなにおあつらえむきでも、これでいいということでもない。

他者にとどくまえに萎れてしまいそうなつたない出来映えだが、いまはこんなところこそつとさしだしておきたかった。

一九九〇年三月三十一日

私家版詩集

「遠く羊水をはなれて」

発行

一九九〇年四月

著者

吉田恵吉

編集・発行

〒939-8306 富山市
高屋敷731-6 吉田恵吉